

近世語用例 一 二

一、せどひ

「続俳句講座」第七卷所収、額原退蔵博士稿「貞門談林俳諧語彙」せの条に左の記事がある。

「せとひ 不詳。吝嗇の意か。醒睡笑、三「世度卑なる出家あり。一人の弟子にいふ、明日は吉野の花見に行かん、先途程遠し、暁よりおきて出立を用意せよ。心得たりと夙におき、酒飯とゝのへ戸を叩きければ、坊主いまだ夜ぶかなりとおきず。さる程につねづ／＼弟子にかくし、いねざまには焼味噌と号して鶏の玉子をとゝのへ、肴に用ひて酒をのむ事を心に思ひあけるが、その時こらへかね、夜がふかいか浅いかは知らぬ、やきみそがてゝはもはや三番ないた。」崑山集「門田まもる僧都はせとひ坊主哉」長頭丸。」

「せとひ」の用例は外に、曾我休自の「為愚癡物語」(寛文二年刊)卷四の第十一、「貴聖のひそかに後生物がたりの事」の条に

「みな人後生をねがふと云て、仏の内証をもしらざる、よくなし坊主のしめしをうけて、なまぢ多あるひと、經文論釈のかたはしを聞、多く寛てまことをしらざる、せどひの義理講釈をつけ、又われとすいりやうをなしさだめて、是より外はあらじなどゝおも

ひさだめ、我こそ仏法はあきらめたれなどゝじまんをなし、物をもしらざる出家をなぶり、仏法だてして、仏のいましめをやぶり、五常の道をそむき、他宗をよしあしとそしり、物しりがほして、うき世をわたる人あり」

とあるのに気がついて、語義を詮索する気になった。

元和三年版「下学集」言辭門第十七「世渡扉 京町、之小庵謂之、世渡扉也」(岩波文庫本)

「易林本節用集」・下・世・人倫「世渡扉 扉、又作卑」(日本古典全集本)

「饅頭屋本節用集」・世・人偏「世渡卑」(日本古典全集本)

「積園本節用集」・下・世・人偏「世渡卑 或作世度扉也京市中之小庵居住僧云……」

「和漢音積書言字考節用集」卷第二・乾坤下・世「世渡扉 今世在三市中二街、祈願者之舎」

更に「日葡辞書」に「Xedofu」があり、その語釈に「しかるべきひろい場所に建てるのが出来ず、聚落のなかに立つてゐる寺。」とある。又「Xedofu」の語釈は「そのやうな寺の仏僧。」以上の各記事によつて、「世渡扉」・「世渡卑」の語意は大體掴めたと思うが、今後更に用例を蒐集して意義の正確を期したい。尚「日葡辞書」の語釈は亀井孝氏の御示教に依つた。厚く御礼申し上げる。最後に、「運歩色葉集」せ之部に、「世度扉」(三ヶ尻氏校訂本)と見えるのは何かの誤であらうか。諸家の御教示を得たい。

二、あらまじ

橋本四郎氏の「ベシ・マジの接続面の混乱」(「国語学」二二輯)に、「助動詞ベシ・マジは……院政期以後になると、二段系の活用の動詞に対してそのイ列又はエ列で終る形——未然形と見うる形に接したものが現れる、室町時代になるとこの形がむしろ普通になり、漸次このまゝで定着に向ふやうである。この間四段系の動詞に対しても、ア・ハ・マイ・キカマイのやうに未然形に接続したものが見られるが、用例の拾へる範囲がごく狭い上、現はれる時期も短い。従つてこれはごく一時的且つ局部的現象に終つたものと解せられる」と述べられている。西鶴語彙研究のため近世前期の諸文学作品を調査している内気がついた、四段系の動詞の未然形に「マジ」の接続した用例を左に挙げてみよう。

「うらしま」(寛文前後書写奈良絵本)「此はこのうちに、いかなるたからも、ありけるを、われにみせしとてや、かの女はうの、せいしけん、いまは、なにかは、くるしかるへき、たからは、身のさしあはせと申事の、ありけるそや、あけたりとも、へちの事はあらまし物をとおもひ、すてに、あけんとしけるか、猶いかゝあらんとすらんと、おもひけれとも、たへかねて、ふたをあげければ、中より、ほそきけふりたちて、身にあたりければ、にはかに、ひたいに、四かいのなみをたゞみ、こしは、ふたへにかゝみて、はくはつたるせうにそ、なりにける」(「室町時代物語集」第五・二二〇頁)

「為人鈔」(寛文二年刊)巻九の七、「毎日寄聚テ兎ヤセン角ヤアラマジト、談合落着セザリシヲ」

「大坂独吟集」(延宝三年刊)・上・鶴永独吟、「盤得かくちのなみたに雪消て　こよみえよます春をしらまし　けふり立表か千嶋の初やいと」

この鶴永(西鶴の初号)の付合は、「拾遺集」・春・藤原朝忠の「鶯の声なかりせば雪消えぬ山里い、かで春を知らまし」を踏まえた事は明白であるが、一句立の意味は明白でなく、山田・太田・土居・岡崎・阿部・村岡・小宮諸先学の論議録「西鶴俳諧研究」にも、「いかで春をしらまし」の意味とか、「しらまし」で「知りうるだらう」に近い意にとるとか、「遣句にもならない。ヤケ句」だとかいう意見が交されている。高瀬梅盛の付合集、「類船集」(延宝四年刊)巻一の「色葉」の条に、「暦のなき遠嶋にハ草木に春秋をしるそとよ」と見えるように、「雪消えて」春の来るのが分る筈なのに、愚癡の盤得(槃特)であるから、「こよみえよます」、「春をしらまし」の意と解すれば素直に納得される句意である。「あらまじ」の「じ」の濁点が無かったので理解に苦しんだ例であろう。

「好色一代男」(天和二年刊)巻二の三、「さもあらば、今宵廿七日月もなき夜こそ、人もしらまし、しのはせられよと申のこしと」

同右・巻二の四、「おそらく、よねの風俗、都にはぢぬ撥をと、竹隔子の内に、面影見すにはかへらましと、七左衛門といふ、揚屋に入て」諸註、「しるまじとあるべき所」、「しるまじの訛誤」などと記すが、当時の慣用語法と断じて差支えないであろう。

「吉原大豆俵評判」(天和三年刊)「片岡……をよそけいせいつか

をにきらんともから今での花鳥ハ知らまし」(「未刊文芸資料」第三期本)

「色里三所世帯」(貞享五年刊)江戸の巻の三、「此大臣ハ金すてに、はるふの御下向ありとハ、よもやしらまし」

「新可笑記」(元祿元年刊)巻二の五、「今此湖水の東の磯に浜びさしわづかにして、住とは人のしらまし」

「いつを昔」(元祿三年刊)「須臾は淋しからまし蟬の声 松風」尚四段以外の動詞に接続した例は

「東山殿子目遊」(延宝九年刊)・三、「あはれ世の中にせまじきものはみやづかへ」、

「椀久一世の物語」(貞享二年刊)・上の六「札あまりに読みうちかゝつて其座立つ事を惜む夜もすがら仕合せよく勝て三百文、さもしやせまじき事なり」

さて、四段系の動詞の未然形にマジが接続する慣用語法が近世前期に行われていたとすると、従来西鶴の作品に見える「有まじき」(「男色大鑑」巻五の二)等の例は「アルまじき」と無意識的に訓んでいたが、今後は慎重な検討を必要とするようである。筆者も今後の宿題としたい。

三、蛇の息

虹が蛇であり、虹の出現することを「虹ふく」・「虹立つ」と言うことは、民俗学・方言学の研究論文、例えば、宮良当壮氏の「虹の語学的研究」(「金沢博士還暦記念東洋語学の研究」)、橋正一氏の「虹は蛇なり」(「旅と伝説」昭和十年七月号)等で明瞭である

が、今筆者の目に触れた近世の諸用例を参考のため列記しよう。

「世話尺」(明暦二年刊)巻三・十四・以呂波寄、因誹諸付の仁文字の「虹」の条に、「蛇息」

「類船集」巻一の「虹」の条に「蛇の息」

「二葉集」(延宝七年刊)「雲にうつりて消る蛇の息 大酒の座にへたまらすふく嵐 高山三昌」

「西鶴大矢数」(延宝九年刊)巻一の第十、「膳棚ならへて長はしの露 花ハ雨虹の引事いつく迄 世上に不思議蛇の息の春 土塔会やかすむ夕の物語」

「頭書増補訓蒙図彙」(元祿八年刊)巻の一、天文・「虹こほろにし俗 蛇こほろのいき」

蛇又は養等が息を吹いたものが虹となるという常識を踏まえた付合は、

「難波あたりで虫やくらん 紀の海につつたちみゆる秋の虹 藤本久兵衛重屋」(「鷹筑波集」・巻四・寛永十九年刊)

「はしてかた夕虹立を詠やり 養吹はらふ風は箒よ」(「俳諧続独吟集」・下・一雪独吟・寛文年間刊)

「櫃つゝら雲路をさして運覧 蛇が息をつく早鐘の音 積一村」(「雲くらひ」・下・延宝八年刊)

「夕虹や紫雪の梯かたの浦」(「日本行脚文集」巻五・元祿三年刊)

「虹吹てぬけたか涼し竜の牙 桃隣」(「陸奥衛」巻五・元祿十年刊)

「そよりく松の隣に桐の花 従吾 虹と申はひことのいき 長緒 笠取て招けば船も合点して 八紫」(「山中集」元祿十七年

刊)

又「虹が吹く」という表現は、

「此ノ橋ト申ハ人間ノ渡セル橋ニテモ無之、只ダ己レト出現ンタル石ノ橋ニテ、其ノ長サ二町ニ余リ候ヘ共、横ノハ、尺ニモ不足ラ、輪タル所ヲ物ニ縦ユレハ、電ノ吹タル形チニテ、雲ニ從ヘテ見ヘタリ」〔古本能狂言集〕・卷五・集類・石橋〕〔原文の送仮名を便宜上本文に入れた〕

「たいさうな事」上下に虹の吹いたる供も行キ 山下薩秀堂
桜木〕〔万句合〕宝暦十一年・鶴一〕

「おし合にけり」跡先て銭をほしかるにじか吹 同〔麻布まつがへ〕〔同右 宝暦十二年義三〕

「すさまじい事」真ン中に番所コの有ル虹かふき〔机鳥評万句合・宝暦十二年十月二日会・地一〕

「なかひことかな」公家衆の江戸出立ッににじがふき〕〔万句合・明和五年・礼一〕

「しつかりとする」そりや虹かふいたそと出て引ッはしよる〕〔同右・明和七年・智二〕

「江戸中をちちごやにしてにじがふき 同〔四谷ますほし〕〔同右・天明元年・礼三〕

「駒ヶ嶽手綱のやうに虹が吹き」〔柳多留 一四九〕

「妙々」虹が吹たと出てはしより 牛コミ酒好〕〔神の田草〕
文化五年刊〕

以上各項目の諸用例アト・ランダムに羅列したが近世語研究に多少なりとも参考になれば幸甚。尚一々断らなかつたが、異体漢

字は現行字体に改めた。(一九五九・一・二四) (前田金五郎)